

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

別所裕介

【所属】(助成決定時)

広島大学大学院国際協力研究科

【研究題目】

現代チベットの家畜慣行の変遷に関する研究—中国併合以前から西部大開発までのスパンで

【研究の目的】(400字程度)

中国では現在、チベット高原の水源保全のため、そこに暮らす牧畜民を都市部へ移転させ、草原を一定期間無人化する移民政策が施行されている。西部大開発の始動以来 10 年間で、「退牧還草」(2002)、「生態移民」(2004)、「集住化プロジェクト」(2009)、「生態牧畜業建設」(2013)の4つが、総計で 75 億元という膨大な予算を投じてめまぐるしく展開されてきた。

こうした一連の措置にも関わらず、現地では期待された環境／経済上の効果が上がらないばかりか、7 万人を超える移住者が都市部での就業困難や不適応に直面し、鬱積したストレスによって社会不安が高まるなど、抜本的な対策が求められている。中国の学术界でも、当初優勢だった直線の同化論が影を潜め、移住後の彼らに「畜舎飼育」や「限定的共同放牧」の道を用意することで段階的な社会適応を図っていくことの有用性が論じられている。だが、こうした「半同化」論的アプローチを唱える研究者は、家畜の物質的・経済的側面にのみ注意を向け、牧畜民が家畜との間に築いてきた宗教文化面の関係にはおしなべて無関心である。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、今後長期に渡って牧畜人口の一部が都市部での生活を余儀なくされる現状をふまえ、より十全な生活支援策を構築していくためには、経済動物としての家畜そのものに付随する乳・肉・毛・皮・糞といった畜産資源のサポートを限定的に行って了とするのではなく、牧畜民が家畜に見出す象徴レベルの価値認識にまで配慮した、人間一家畜関係の包括的な理解に立った支援策の立案が不可欠と考える。

このため本研究では、黄河源流域の牧畜社会で普遍的に観察される家畜慣行「ツェタル(*tshe thar*)」に焦点を当て、現地の牧畜村に住み込んで、戸別調査による聞き取りと参与観察を行った。ツェタルとは「(生き物の)命を解き放つ」という意味で、土着の精霊や神仏への供養物として畜群の中から選ばれ、耳に穴を穿って聖別される。この儀礼を経た家畜は、去勢→交配→剪毛→屠殺→出産という年間のルーティンから切り離され、自然死するまで迫害されることなく群れの中で過ごす。

本研究では、現在の牧畜コミュニティにおいて日常的に実践されるこうしたツェタル慣行の通時性と共時性を明らかにするため、①高齢者世帯を戸別訪問してツェタル慣行の変遷について聞き取りを行い、合わせて②12 世帯の所有家畜におけるツェタルの割合と実践動機についてデータを収集した。この結果、ツェタルをめぐる牧畜民と家畜の象徴レベルの関係について、以下の 2 点が浮かび上がった。

①通時性：人民公社による集団化以前／集団化以降文化大革命終息まで／現在の市場経済体制期、という 3 つの時代を通し、ツェタル慣行の形式は社会主義イデオロギーの強弱に応じて大きく変化したものの、その実践上の含意は文革期においてさえ暗黙の形で維持された。

②共時性：市場経済が辺境社会にまで浸透しつつある今日、特に 2006 年前後から畜群に占めるツェタルの割合は大幅に増加している。その重要な背景として、地元で尊望を集める化身ラマが、死者供養や厄払いの儀礼に際し、地域の村々へ盛んにツェタルの実践を呼びかけていることがある。

【結論・考察】(400字程度)

半世紀を越える時間の経過の中で家畜は私有と公有の間を揺れ動き、それに伴ってツェタルの形式上のパターンも大きな振幅を経験した。他方で、家畜を単なる消費財と捉える見方に併走して、これを「有情」(*sems can*)という仏教の文脈で人間に等置して捉える観念的把握が定性的に維持されてきた。牧畜民をプロレタリアートに、家畜を労働点数に変換する革命期のイデオロム操作は、家畜を純粋な消費財と見な

すことを人々に強要し、また形式的にも一切の儀礼的要素は「迷信」として社会から排除された。しかしそうした極限状況においても、家畜を「有情」へと変換する思考様式は非明示的に温存され、その基層に横たわる家畜への象徴的な意味づけが断たれることはなかった。

改革開放以降は、「宗教アイデンティティの復興」と「市場経済への包摂」という2つの社会局面によって、家畜を「有情」に変換する基層的な紐帯は強化され、それに伴ってツェタルの絶対数は大幅に増加した。総じてみれば、これは家畜を介して仏教アイデンティティが強化されるという社会現象である。

以上のことから、劇的に変動する中国辺境の牧畜社会において、少数者が真に住みやすい環境を整えるためには、「家畜と人間の基層的関係の強靱な持続性」に総合的な理解を形成することが不可欠である。